

御幸町だより

京都御幸町教会
〒604-0933
京都市中京区御幸町通二条下る
山本町434
TEL・FAX (075) 231-3441

『神は低きに』 (詩113:1~9編)

牧師 村島 義也

詩113~118編はもともと一つの纏まりをなしており、ユダヤ教の伝承において「エジプト・ハレル」と呼ばれ、出エジプトの記念である過越しの祭りの定番。細かく言えば113、114編は過越しの食事の前に、115~118編は食事の後に歌われる。あの、我々にとっての新たな過越しの記念となる最後の晩餐においても、主イエスと弟子たちはこれらの詩編をもって賛美をなしたことであろう。

さて、アドヴェントにあたり詩113編に目を留めたい。

1節~ハレルヤ(主を賛美せよ!)、ハレル(ほめたたえよ、賛美せよ)の連呼をもって始まる。2節~「時を超えて」ということ、3節~「東の果てから西の果てまで」つまり所(地域)を超えて。時間、空間、永遠、普遍、天地に鳴り響くファンファーレのようだ。主の御名はそれに相応しい。

それにしてもこのようなドデカイ賛美を発信する(呼びかける)民はどのような民か。偉大な民であるか。この世の目にはそうは映らない。ユダヤの歴史~ほとんどは強国・大国の狭間で翻弄され、支配されるという「卑小さ」である。にもかかわらず、やはりこの賛美をなす民は偉大である。それは軍事、経済、版図における偉大さではない。「真に偉大なるものを知る」「賛美すべき方を知る」、その認識・信仰における偉大さである。

我々一人一人もこの世にあって力なき卑小な存在であるかも知れない。教会の礼拝も殊にわが国においては卑小な営みに過ぎぬかも知れない。しかし真に偉大なるもの、天地の創造者なる神への礼拝・賛美に選ばれ、召されている。そこに主の民の誉れがある。

過越しの祭りの度、イスラエルは主の救いと選びを思ったことだろう。申7:6~8。主はその愛ゆえに、どの民よりも貧弱であったものを選びご自分の宝の民とされた。我々も主イエスにより「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」との恵みの言葉を聞くものである。卑小なるものの内に宿る偉大さ~それは神が目留め給うという恵みであ

り、愛である。

このような「偉大と卑小」のテーマは、この詩にさらに深まる。4節以下は注目すべき。動きがあつて面白い。主の栄光、高貴・偉大を仰ぎ讃える詩人の視線は、高く・高く、上に上る。4節、「国々(地)を超え」さらに「天を超え」。5節、至高の存在、比類なき主の栄光、高さ。主は御座を高く置き給う。

さてしかし、主はその高き御座にどっかと身を据えられるのではない。6節、「天と地を」は上げた視線の反対をたどるものなので、段階的に「天を、そして地を」とした方がわかりよいか。なんと、栄光の主はその高き御座より低く下り給うのであると言う。どこまで下り給うのかと言うと、それは低く下られた主の御目の捉えるところ。それは塵芥の中に埋もれているもの~忘れられ、見捨てられ、価値空しく取り扱われているもの、〈弱い者〉〈乏しい者〉〈家を追い出された子のない女〉(父権的な家社会において、子を産むことは女性の立場(身分)に直結する事であった。なにもイスラエルに限らず、古代オリエント一般「子なきは去る」という習慣があり、ハンムラビ法典にもあるように子を産まぬ妻を離婚することができた)。ともかくも主は下り給う、低く下り給う。小さきもの、弱きもののすぐ傍まで。不条理と痛みの地の底辺まで。詩人は高き主が低く下るという逆転の偉大さに、救いと正義が生じるのを見るのである。

さて、この詩編は新約の信仰において新たな意義を有するものとなった。過越祭の定番であったこの歌は、アドヴェントの聖書日課となった。これは預言の響きを帯びる歌であった。「栄光の主が低く下り給う」~その実現がまさに神の独り子・キリストのご来臨。フィリピ書の「キリスト賛歌」に象徴的(2:6以下)。そしてこれこそまさにクリスマスの中心にある飼い葉桶の意味なのだ。世の卑小さを宿りとした、そこに秘められた真の偉大さ。飼い葉桶の嬰兒は神の愛の奇跡、まさに比類なき神の形でこそあったのだ。

この113編に、主を宿したマリアの賛歌が深く呼応している(ルカ1:46~49)。